

注意: 「答」そのものは採点の対象にはしない。「答」に至る過程を採点の対象にする。したがって、答えは単に「答」を書くだけでなく「答」に至るまでの経緯を論理的に論述する事。

答案作成は数式も含め作文であるから、主語・述語・テニヲハ・句読点等に十分注意する事。

証明なしで定理・命題を使用するときはその正確な内容を明示する事。

採点は減点法を採用する。つまり間違いの内容によっては白紙答案より低い点数になる場合がある。careless miss でそのような事はないが、「分からなくても適当に何か書いておけ」という姿勢で回答するとそうなることがある。

在籍番号欄について: 再履修者は 10 桁の在籍番号を書く事。1 年生は出席番号 (多くは 2 桁) でよい。

裏にも問題あり

1 W が部分空間である事の定義を述べよ。また

$$W = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^3 \mid x_1 - x_2 + x_3 = 0 \right\}$$

とおくとき W が部分空間である事を示せ。更に W を $\langle \mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_n \rangle$ の形で表せ。

W が次の 3 つの条件を満たすとき (\mathbf{R}^3 の) 部分空間であるという。

- (1) $W \neq \emptyset$, 即ち W は空集合ではない。
- (2) W の任意のベクトル \mathbf{x}, \mathbf{y} に対し $\mathbf{x} + \mathbf{y} \in W$ となる。
- (3) W の任意のベクトル \mathbf{x} と任意の実数 $\alpha \in \mathbf{R}$ に対し $\alpha \mathbf{x} \in W$ となる。

この部分の様に青色で書かれた部分は注意等であり、解答例の部分ではありません。

$\mathbf{0} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ に対し $0 - 0 + 0 = 0$ が成立するので $\mathbf{0} \in W$ である。 $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix}, \mathbf{y} = \begin{pmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \end{pmatrix}$ を W の任意のベクトルとすると、

$x_1 - x_2 + x_3 = 0, y_1 - y_2 + y_3 = 0$ が成立している。このとき $\mathbf{x} + \mathbf{y} = \begin{pmatrix} x_1 + y_1 \\ x_2 + y_2 \\ x_3 + y_3 \end{pmatrix}$ に対し $(x_1 + y_1) - (x_2 + y_2) + (x_3 + y_3) =$

$(x_1 - x_2 + x_3) + (y_1 - y_2 + y_3) = 0 + 0 = 0$ が成立するので $\mathbf{x} + \mathbf{y} \in W$ である。 $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix}$ を W の任意のベクトル、 α を任意の実

数とする、 $\alpha \mathbf{x} = \begin{pmatrix} \alpha x_1 \\ \alpha x_2 \\ \alpha x_3 \end{pmatrix}$ である。 $\alpha x_1 - \alpha x_2 + \alpha x_3 = \alpha(x_1 - x_2 + x_3) = \alpha \cdot 0 = 0$ となるので $\alpha \mathbf{x} \in W$ となる。以上により W は部分空間となる。

$\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in W$ に対して $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_1 + x_3 \\ x_3 \end{pmatrix} = x_1 \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} + x_3 \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$ となるので $W = \left\langle \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} \right\rangle$ を

証明する。 $1 - 1 + 0 = 0$ 及び $0 - 1 + 1 = 0$ なので $\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} \in W$ となる。よって $\left\langle \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} \right\rangle \subseteq W$ となる。逆に任意

のベクトル $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in W$ に対し $x_1 - x_2 + x_3 = 0$ が成立するので、 $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_1 + x_3 \\ x_3 \end{pmatrix} = x_1 \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} + x_3 \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$

が成立するので $\mathbf{x} \in \left\langle \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} \right\rangle$ となる。よって $W \subseteq \left\langle \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} \right\rangle$ となり、以上により $W = \left\langle \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} \right\rangle$

となる。

学		在		氏	
科		籍		名	
		号			

2 次のベクトルが 1 次独立かどうか調べよ。

$$v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 4 \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ a \end{pmatrix}$$

$a_1v_1 + a_2v_2 + a_3v_3 = 0$ とする。このとき成分で書き直すと

$$\begin{aligned} a_1 + a_3 &= 0 \\ a_1 + a_2 + a_3 &= 0 \\ a_1 + 4a_2 + aa_3 &= 0 \end{aligned}$$

となる。このとき $a_2 = 0$ が成立する。 $a_2 = 0$ を代入すると

$$\begin{aligned} a_1 + a_3 &= 0 \\ a_1 + aa_3 &= 0 \end{aligned}$$

を得る。

$a = 1$ のとき $a_1 = 1, a_2 = 0, a_3 = -1$ という解を持つので v_1, v_2, v_3 は 1 次独立ではない。

$a \neq 1$ のとき $(a-1)a_3 = 0$ かつ $a-1 \neq 0$ より $a_3 = 0$ となる。よって $a_1 = 0$ も従う。以上により解は $(a_1, a_2, a_3) = (0, 0, 0)$ しかないことが分かり、このときは 1 次独立である。

3 次のベクトルの組が部分空間 $W = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^3 \mid x - 2y + z = 0 \right\}$ の基底である事を示せ。

$$v_1 = \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix}$$

最初に v_1, v_2 が 1 次独立である事を示す。 $a_1v_1 + a_2v_2 = 0$ が成立しているとする。成分で書き直すと

$$\begin{aligned} 2a_1 &= 0 \\ a_1 + a_2 &= 0 \\ 2a_2 &= 0 \end{aligned}$$

である。よって $a_1 = 0, a_2 = 0$ となるので、 v_1, v_2 は 1 次独立である。

次に v_1, v_2 が W を生成する事を示す。 $2 - 2 \cdot 1 + 0 = 0$ なので $v_1 \in W$ である。 $0 - 2 \cdot 1 + 2 = 0$ なので $v_2 \in W$ である。よって

$\langle v_1, v_2 \rangle \subseteq W$ が成立する。逆に $W \subseteq \langle v_1, v_2 \rangle$ を示す。 $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ を W の任意のベクトルとする。このとき $x - 2y + z = 0$ が成立してい

る。予備的計算として $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ が $x = a_1v_1 + a_2v_2$ となっていると仮定して、その係数 a_1, a_2 を求める。計算より $a_1 = \frac{x}{2}, a_2 = \frac{z}{2}$ となる。

$$\begin{aligned} \frac{x}{2}v_1 + \frac{z}{2}v_2 &= \frac{x}{2} \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} + \frac{z}{2} \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} x \\ \frac{x+z}{2} \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = x \end{aligned}$$

となるので、 $x \in \langle v_1, v_2 \rangle$ となり、 $W \subseteq \langle v_1, v_2 \rangle$ が分かり、 $W = \langle v_1, v_2 \rangle$ となる。

v_1, v_2 は 1 次独立で W を生成するので W の基底になっている。